



ツグミなど冬の渡り鳥 飛来遅く 旅立ち早く

秋に飛来し、春先に北の繁殖地に飛び立つ渡り鳥(冬鳥)の日本での滞在期間が1986年に比べて約1カ月も短くなっていることを、横浜市内での観察データを基に、東京都市大の小堀洋美教授(保全生物学)が突き止めた。

渡り鳥が日本に来る時期が遅く、旅立ちの時期は早くなっているため、地球温暖化と都市部のヒートアイランド現象の結果、横浜市の年間平均気温が約1度高くなったことが、鳥の渡りに影響を与えたと推測。同様の傾向は北海道や九州の渡り鳥でも見られているという。

地球温暖化が渡り鳥の行動に

滞在期間が1カ月短縮

横浜市内の観察データ
東京都市大教授が解析
温暖化の影響か



写真上は、渡りの時期が温暖化の影響で変化していることが分かった渡り鳥の一つ、ツグミ。写真下は、ウソ(真木広道さん撮影)

南半球から北極圏にまで飛行することもある鳥の渡りは、長い進化の歴史の中で身に付けた特異な行動だ。地球温暖化の影響を受けやすく、行動が変化すれば、幅広く生態系に異変を引き起こすとの懸念もある。

英国に本部を置く鳥類保護団体、バードライフ・インターナショナルの専門家は「越冬地や繁殖地、その間の休息地など広い範囲を利用する渡り鳥は、地球温暖化の影響を特に受けやすい種の一つだ」と指摘する。

生態系に異変懸念も

鳥の渡りは、秋に植物が実をつけたり、春先に昆虫が大量に発生したり、といった餌になる生物との微妙な関係の上に成り立っているため、気候が変わると、鳥が十分な餌を捕れなくなる可能性がある。旅の途中での異常気象、海面上昇や高潮で沿岸の休息地が失われることも心配される。

鳥は、多数の昆虫を食べることで虫の個体数を一定に抑えているし、植物の種子の拡散や受粉などに重要な役割を果たしている鳥もいる。行動パターンが変われば、生態系に大きな変化をもたらす恐れもある。

影響を与えるとの報告は、欧州や米国ではあるが、日本での調査は少なく、温暖化の生物への影響を知る上で貴重なデータとなりそうだ。

同市内の「横浜市民の森」では86年から、日本野鳥の会や市の職員などが鳥の観察を続けており、記録から冬鳥が最初に見られた日(初見日)や最後に見られた日(終見日)などが分かる。小堀教授が、ウソやアオジ、ツグミなど毎年飛来した6種類の冬鳥のデータを解析した結果、86年から2008年までの間に、ほとんどの鳥の初見日が

年々遅くなり、最も変化が大きいツグミではこの間に約19日遅くなっていた。

逆に関終見日は6種全てで早くなり、シヨウヒタキでは、36日も早まっていた。この結果、6種平均で半年余りだった日本での滞在期間が29・7日短くなった。

小堀教授は「温暖化の影響は今後、さらに顕著になるとされる。渡りなどの生態の変化が種の生存、その種とつながりを持つ他の生物や生態系に与える影響などを含めて、さらに詳しい研究が必要だ」と話している。

●この記事・写真等は共同通信社、熊本日日新聞社の許諾を得て転載しています。紙面は熊本日日新聞社提供。無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。